

オノ・ヨーコ〈生きる喜び〉ネオンサイン 2013年
祈りを込めたメッセージをまちなかに展開。誰もが自分
自身の愛や願いを表現できる。名古屋テレビ塔のほか、
明治安田生命ビル屋上電光掲示板、名古屋
ビルディング、名鉄東岡崎駅前(北口掲示板)などで。
撮影=筒口直弘[本誌]

あいちトリエンナーレ
2013 AICHI TRIENNALE 2013

揺れるあいち、 揺さぶるアート

「あいちトリエンナーレ2013」が開幕した。2010年にスタートした3年に一度の日本最大級の国際芸術祭だ。今回のテーマは、「揺れる大地—われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活」。東日本大震災を含め、世界各地で社会変動が起きているなか、アーティストもそれぞれの世界観と向き合ってきた。そしていま、名古屋そして岡崎の会場で、建築的視点も取り入れた国内外の先端的な76組の現代美術、パフォーマンス、オペラが妍を競う。アートが揺れ、アートが揺さぶる、あいちの祭典を紹介する。[会期：8月10日(土)～10月27日(日)]

栄エリア
名古屋テレビ塔

企画制作 | 新潮社 デザイン | 大野リサ

オノ・ヨーコ
前衛芸術家、音楽家、平和運動家。
あいちトリエンナーレ2013では〈生きる喜び〉のほか、〈光の家の部分〉
〈マイ・マミー・イズ・ビューティフル〉
〈スカイTV〉(ウィッシュ・ツリー)の全
5作品を出展。



栄エリア・愛知芸術文化センター

あいちトリエンナーレの中心地は、名古屋随一の繁華街・栄エリア。名古屋テレビ塔、オアシス21、愛知芸術文化センターの3会場を擁する最大のエリアだ。

愛知芸術文化センターでは、ヤノベケンジの希望のモニュメント《サン・チャイルド》が来場者を出迎える。ヤノベは同センター10階にも、新作の子どもの胸像や、ピートたけし原画のステンドグラスやマティスの原画を展示する《太陽の礼拝堂》などを設置し、一般募集で選ばれたカップルが実際にそこで挙式をする新プロジェクト《太陽の結婚式》を展開。「愛を知る。愛知ならではの作品として注目を集めている。



(左)ヤノベケンジ《サン・チャイルド》2011年
(上)ヤノベケンジ《太陽の結婚式》のためのドローイング 2013年 ともに©YANOBE Kenji
(下)参考作品画像 ソ・ミンジョン《ある時点の総体》2010年
Courtesy of the artist
(下右)名古屋市市政資料館の留置場をモチーフにした新作を準備中のソ・ミンジョン。
撮影=筒口直弘[本誌]



同センター内を進むと、床や壁、天井にまで黄色と赤色のテープが貼られているのに気が付く。実はこれは《福島第一さかえ原発》という作品。福島原子炉建屋の原寸大（1/1スケール）の図面を示したもので、ここに原発を「転送」するというプロジェクト。ちょうど愛知芸術文化センターにすっぽり収まる原発の大きさを身体で感じてもらうという宮本佳明の作品だ。

以下に、愛知芸術文化センターのアーティストと作品をいくつか紹介する。現在の建物が記憶する「時間」を1/1スケールの発泡スチロールで精密に再現し、その「爆発」の瞬間を展示する《ある時点の総体》シリーズに取り組んでいるソ・ミンジョンは、「芸術祭のテーマと自身のテーマが並行して驚いた」という。今回は、名古屋市市政資料館の留置場をモチーフにしているが、

料館の留置場をモチーフにしているが、「留置場や独房であることの歴史や政治性の問題ではなく、その場所の持っている時間性が大切」なのだという。「その場所の持っている長い時間を精密に再現したうえで、あえてそれを壊す。その爆発の瞬間を見せることで、独房の持っている長い時間と爆発の刹那という対立する二つの時間の境界線を曖昧にし、時間を開くのです」。

「浮遊する都市（フロートینگ・シティ）」を体験させるインスタレーションはハン・フェンの作品。写真を印刷したトレーシングペーパーで作られた2600個ものビルを天井から吊し、部屋の通路を観客が歩くとその動きに合わせて街全体が揺れ動く。「今回はフロートینگ・シティのシリーズ2回目。図らずも芸術祭のテーマと私の考えとが一致したといえます。私は、住んでいる上海の街を歩きながら写真を撮って街を記録しています。だから、本物の都市を通しているが、

フロートینگ・シティは私の心の中心の都市でもあるし、見る人が自分の街であると感じてもいい。またこの街は人がそこを通ることで揺れ、人も街の、つまりは作品の一部に見えてくるのです」。



(右)制作中の参考画像
宮本佳明《福島第一さかえ原発》
2013年 撮影=筒口直弘[本誌]
(右)愛知芸術文化センターに原寸大の原子炉建屋が転送されるイメージ図。



(上)《Floating City》を制作中のハン・フェン。
撮影=筒口直弘[本誌]

(左上)平田五郎《Mind Space - 積み木の家》2000年 福岡市美術館での展示風景。
(左下)パラフィンワックスを使った新作に取り組む平田五郎。
撮影=筒口直弘[本誌]



白川公園エリア

栄エリアの南西に位置する緑豊かな白川公園。ここに黒川紀章設計の名古屋市美術館がある。この会場を「揺さぶる」のは建築家・青木淳だ。美術館に新しい空間や動線を取り入れて、アルフレッド・ジャール、イ・ブル、ワリッド・ラード、杉戸洋、青木野枝などの作品を鑑賞しながら、美術館の見方も変えるというコラボレーションを試みる。

また、美術館の屋外には、藤森照信の《空飛ぶ泥舟》が展示される。

公園に隣接する高速道路の高架下には、豊浜港から引き上げられた漁船が置かれ、東日本大震災で被災した漁師の話にインスパイアされたプラスト・セオリーの映像作品を鑑賞することができる。



藤森照信《空飛ぶ泥舟》2010年
「藤森照信展—諏訪の記憶とフジモリ建築」展(茅野市美術館)
での展示風景。撮影=茅野市美術館



プラスト・セオリー《The Thing I'll Be Doing For The Rest Of My Life》2013年 漁船は豊浜港から輸送され、白川公園に隣接する高架下の展示会場にクレーンを使って運び込まれた。会場では、デッキの上から少年が語る物語を、タブレット端末で鑑賞する。撮影=筒口直弘[本誌]

長者町エリア

あいちトリエンナーレの魅力の一つに、「まちなか」でのアート展開がある。その拠点として有名になったのが長者町織維街だ。写真の看板で知られる通りの周辺で今回も様々な作品が展開されている。故国トリニダード・トバゴのカーニバル「マス」のコスチュームデザイナーからキャリアをスタートしたマローン・グリフィスは、パレードのマスクと衣装《太陽のうた》を制作。3・11以降の日本の再生と復活をテーマに、不死鳥をモチーフにしたものだ。グリフィス自身、「パレードを楽しんでほしい、マスクと衣装に込められた生と死、再生の願いを感じて欲しい」と語る。さらには、「名古屋という産業の発達した都市で、つまり自動車産業が発達し、道路が基盤の目のように整備され、四角い建物がたくさん



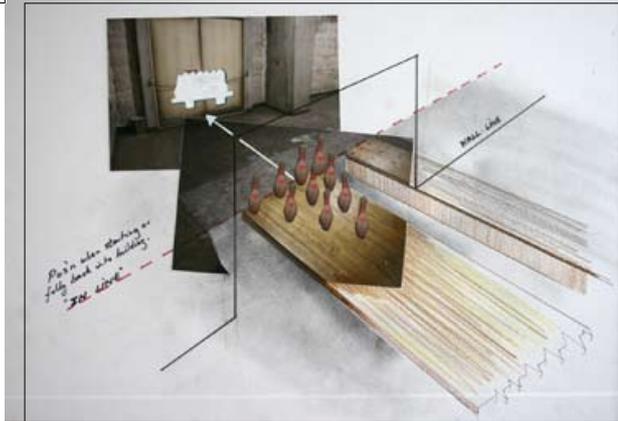
(上)《太陽のうた》をスタジオで制作中のマローン・グリフィス。旧MARUSOU1階のスタジオにはマスクと衣装が展示されている。
(下右)等間隔で並ぶ看板がユニークな長者町織維街。戦後は日本三大織維街の一つとして栄えた。
(下左)リゴ23《Looking at 2013 From 1952 Nagoya》2013年 旧玉屋ビル外壁 撮影=筒口直弘[本誌]

あるこの都市で、オーガニックな僕の作品がどのように映えるか、すごく楽しみにしている」という(パレードは8月11日と10月19日「予定」の2回)。
ビルの壁面に昭和27年の電気工事の様子を描いたのはリゴ23。歴史を引用したメッセージ性の強い作品で知られ、今回は、昭和の労働者の姿を描くことで、戦後の復興、ひいては日本の復興を象徴させている。
カフェ「コシバ食堂」とギャラリーをオープンするのは、ザ・ウィロウズだ。「名古屋は第二の故郷」という奈良美智が、地元で出会った仲間たちと結成したチームで、名物のういろうとロックバンド「ザ・ハイロウズ」を掛け合わせたネーミング。ビルのガレージを改装して作った会場は大学の文化祭のような味わいだ。ギャラリーでは、奈良が個人的に繋がりのあるアジアの作家などの展覧会を開催する。

納屋橋エリア

名古屋市の中心を流れる堀川にかかる納屋橋はかつての繁華街で、いまは再開発で注目されるスポット。ここにある以前はボウリング場だったビル、東陽倉庫テナントビルが納屋橋会場だ。

ここで大がかりなインスタレーションを試みているのはリチャード・ウィルソンだ。ボウリンググリーンとピンが建物の外に飛び出すという作品で、建物の記憶を呼び戻すという趣向だ。建築や空間に大胆な介入をして人々をあっといわせる作品を生み出すことで知られるウィルソンならではの試みである。



(上)リチャード・ウィルソン Pan drawing for 「Lane 6」 2013年
(下)青木野枝 《ふりそそぐもの／納屋橋》 2013年 鉄のオブジェを張り巡らした吹き抜けの中を客は自由に歩くことができる。作品の中にたまたまいると、素材が鉄だといふことを忘れてしまいがちになる。

青木野枝は、鉄という素材を使って、重さを感じさせない浮遊感のある作品を発表している。納屋橋エリアに展示されている《ふりそそぐもの／納屋橋》は、ボウリング場だったという建物の娯楽性を残した吹き抜け空間に、作品をまるでテープのように張り巡らしたものだ。鉄板から様々な大きさの円を溶断して切り出し、ひとつひとつ溶接し、数珠つなぎにして、軽やかな空間を作り出すという手法だ。

青木は今回の芸術祭では、名古屋市美術館や岡崎エリアでも新作を発表している。納屋橋会場には、名和晃平、片山真理、アンジェリカ・メシテイ、クリスティナ・ノルマンなどの絵画や彫刻、写真、映像などが展示されている。

長者町エリア・伏見地下街

打開連合設計事務所は、ベルリンや深圳でブループリントシリーズを手がけている台湾の建築家集団。《長者町ブループリント》は、昭和の気配を色濃く残す地下街に置いた若い階段のモチーフに、未来に繋ぐ架け橋の意味を持たせている。平面作品だが、ビューポイントに立つと実際に階段があるように見える作品は5ヶ所。また、地下鉄の出入口もブルーに塗り替えられており、夜間はライトアップされる。この作品は、トリエンナーレの後もそのまま残されることが決まっており、伏見界隈の名物になりそうだ。

打開連合設計事務所《長者町ブループリント》 伏見地下街&地下鉄伏見駅連絡通路出入口 階段は「上を向いて歩こう」の歌の、犬は「忠犬ハチ公」の、天井のハシゴ（青色に塗り替え）は「銀河鉄道の夜」のイメージを託している。いずれも台湾でも人気があるのだそうだ。



岡崎エリア

今回から新たに加わったエリア。旧三河国の中心地で、かつては城下町・宿場町として賑わった地区だ。名鉄東岡崎駅、商店街のある康生町、かつての花街・松本町の3つの会場を巡ることが出来る。

志賀理江子は岡崎市出身の写真家。仙台の北釜地区に移住し、地域のカメラマンとして町や祭事、そこに住む人々を撮り続けてきた。2012年に仙台で開催し反響を呼んだ、北釜での4年間の試みを包括した個展「螺旋海岸」を、今回、志賀の故郷での

(上)studio velocity (Wind Scape) 2013年 photo by artist
(下)志賀理江子「螺旋海岸」 2012~2013年 Courtesy of the artist



展示空間に合わせ、新たな構成で発表する。建築家ユニット、studio velocity（栗原健太郎+岩月美穂）は、岡崎シビック屋上の真っ白な空間に0・27mmのポリエステル糸をメッシュ状に張りめぐらせた大屋根《Wind Scape》を制作。《瞬間を閉じ込める椅子》とともに展示した。

パフォーマンスアート



イリ・キリアン『East Shadow』
Courtesy of the artists
photo: Jason Atria Somma

パフォーマンスアートなどの舞台芸術の参加はいちトリエンナーレならではの。今回はサミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』の初演から60年の節目の年であり、芸術祭のテーマ「われわれはどこに立っているのか」に近い世界観を持つベケット的な作品を集めているのが特徴だ。愛知芸術文化センター小ホールを中心に15作品が発表される。

現代の代表的振付家のイリ・キリアンは、東日本大震災に心を痛めたひとり。ベケットの作品「……雲のように……」から着想された新作ダンス『East Shadow』を彼の信頼するアーティストたちと製作し、世界初演する。

振付・映像・サウンド全てを一人で創り上げるマルチアーティストの梅田宏明は、人間の視覚を歪めることで先入観に揺さぶりをかけてきた。今回はアジアの伝統ダンスと最先端のテクノロジーの共存を試みたグループ作品と自身のソロの新作を披露。

ジャンルを横断した舞台を創り出しているARICAは、ベケットの代表作の『しあわせな日々』を新訳にて初演する。ひたすらしゃべり続ける主演女優が埋もれる、小山のようなセットなど舞台美術をアーティストの金氏徹平が設計するのも見所のひとつだ。

梅田宏明『Holistic Strata』
Courtesy of Yamaguchi Center for Arts and Media
photo: 丸山謙二 (YCAM)

プロデュースオペラ

ジャコモ・プッチーニ作曲の名作オペラ『蝶々夫人』が、カルロ・モンターナリオの指揮と、建築の観点から空間と日本美を意識した田尾下哲の演出により上演される。伝統的イタリアオペラと、随所にちりばめられた日本旋律が見事に融合された美しい音楽に注目だ。9月14日(土)、16日(月)・祝15時開演。愛知県芸術劇場大ホールにて。



(上) 田尾下哲(演出)
(下) 安藤赴美子(蝶々さん)



参考画像: ケーシー・ウォン
Shanghai Zenda MOMA
Personal Skyscraper
Workshop 2008
Courtesy of the artist

キッズ・トリエンナーレ

現代美術やダンス、オペラなどさまざまなジャンルのアーティストと一緒にワークショップを楽しんだり、自由に自分だけのアートの世界を作ることが出来るキッズプログラムに参加して、心と身体を動かそう。
「会場・愛知芸術文化センター」8階 入場参加無料

あいちトリエンナーレ2013 8月10日(土)~10月27日(日)

会場一覧

[名古屋]

●栄エリア 愛知芸術文化センター

住所 ■名古屋市中区栄1-13-2

開館時間 ■10:00~18:00(金曜~20:00)

休館日 ■月曜(祝日の場合はその翌日)

※8/26、10/15、21は臨時開館

★栄エリアには、中央広小路ビル/オアシス

21/名古屋テレビ塔も。

●白川公園エリア 名古屋市美術館

住所 ■名古屋市中区栄2-17-25

開館時間 ■9:30~17:00(金曜~20:00)

休館日 ■月曜(祝日の場合はその翌日)

※10/21は臨時開館

●長者町エリア

長者町織維街/伏見地下街

住所 ■名古屋市中区錦2内など

開場時間 ■11:00~19:00(金曜~20:00)

無休

●納屋橋エリア 東陽倉庫テナントビル

住所 ■名古屋市中区栄1-2-45

開場時間 ■11:00~19:00(金曜~20:00)

休場日 ■9月の月曜(祝日の場合はその翌日)、10/7

[岡崎]

●岡崎エリア

東岡崎駅会場

住所 ■岡崎市明大寺本町4-70

開場時間 ■11:00~19:00(金曜~20:00)

休場日 ■第2・4水曜

康生会場

住所 ■岡崎市康生通東、岡崎市康生通西

など

開場時間 ■11:00~19:00

休場日 ■9/19、10/17

松本町会場

住所 ■岡崎市松本町

開場時間 ■11:00~19:00

休場日 ■9/19、10/17

チケット情報

国際美術展:一般チケット1800円(1枚のチケットで、全ての会場の国際美術展にご入場いただけます。購入はプレイガイドなどで)

※パフォーマンス、プロデュースオペラはチケット特設サイトでの購入も可能です

http://pia.jp/piajp/a/aichitriennale/

オープンアーキテクチャーと『あいち建築ガイド』

「あいちトリエンナーレ2013」では、建築の視点からまちの魅力を再発見するガイドツアー形式のオープンアーキテクチャーを開催。川合健二設計の「コルゲートハウス」(豊橋市=写真上)や、愛知県指定文化財の豪商町屋建築「四間道・伊藤家住宅」(名古屋市)など、普段は公開されていない個人住宅を含む15の名建築を見学できる。

また、『あいち建築ガイド一歩いて楽しむ街ミュージアム』(写真下)は、愛知県内の魅力的な建造物の見所を紹介した本。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、五十嵐太郎監修。(美術出版社発行840円[税込])



あいちトリエンナーレ実行委員会事務局

TEL 052-971-6111 http://aichitriennale.jp/